

# 近世日蓮宗の千部会について

——堀之内妙法寺を素材として——

望 月 真 澄

## はじめに

近世の日蓮宗寺院で行なわれた代表的な仏教儀礼に開帳・御会式・千部会等がある。これらの儀礼行事の果たした役割について、影山堯雄博士は、布教という立場から信者に対する信仰の増強策であったと主張している<sup>(1)</sup>。また中尾堯氏は、江戸の年中行事の分析を通じ近世の儀礼行事は縁日としての性格を有していると規定し、儀礼の日常性が庶民の信仰をもたらしたとしている<sup>(2)</sup>。しかし、これらの研究は、儀礼の総体的な祖角からの研究であり、個々の儀礼の性格やその機能については深く触れられていない。こうした儀礼研究の中で、開帳については高木豊氏<sup>(3)</sup>・北村聡氏<sup>(4)</sup>の研究があ

り、祖師像の開帳が庶民の祖師信仰の高揚を促したと規定し、仏教儀礼と庶民信仰との関係を問題にしている点で評価される。ところで、千部会は、「二季の大会」<sup>(5)</sup>の一つとして定着し、大規模な行事であったにも拘らず史料が分散的に残存していることも相俟って、従来あまり研究がなされていない。

そこで、未だ研究業績の浅い千部会をテーマとすることに一つの意義をみい出し、さらに儀礼としての千部会が僧侶や庶民にどう受けとめられていたのかについて分析する作業も必要であると考える。

本稿は、以上の観点を踏まえ、江戸近郊の日蓮宗寺院である堀之内妙法寺の事例を中心に考察していく<sup>(6)</sup>。そして、そこで行なわれる千部会の実態について検討す

ることにより、儀礼としての性格をみるとともに、庶民がそれに参加する形態についてみていきたい。

## 一 妙法寺の概観

寛政三（一七九一）年十月、妙法寺十二世日定が記した「寛延之古記写シ」(?)をみると、

元真言宗仙明寺径学ト云者、元和四年之頃、廿三歳ニシテ改宗、碑文谷ニ属シ、寺号妙法寺と改、母共ニ受戒シテ元寺号之一字ヲ取用、母ヲ妙仙日円尼ト云、自分も同学仙日逢ト改、母死後ニ至而為菩提(提)ニ山号ヲ日円山トシテ開山トス、日逢ニ二祖ト定、依之当寺永々日円山妙法寺ト云、

と、元和年間に改宗して日蓮宗妙法寺として成立したが、元は碑文谷法花寺末寺ニ候処、元禄十二年三月廿六日身延久遠寺末ニ相成、寺号、其儘付属之事と、元禄十二（一六九九）年、碑文谷法華寺が不受不施禁圧で天台宗に改宗させられた折に身延久遠寺末となった(8)。

また、江戸時代の妙法寺の様子を記した『江戸名所図会』には(9)、

堀之内村にあり。日蓮宗一致派にして、頗る盛大の

寺院たり。宗祖日蓮大士の靈像は世に厄除の御影と称す。日朗上人の作にして、その先は碑文谷の妙法華寺（法華寺）にありしを、元禄の頃、故ありて法華寺を天台宗に改められし頃、この靈像をば当寺に移しまゐらすといへり（括弧内筆者）。

と、妙法寺の厄除け祖師像は碑文谷法華寺から移ってきたと伝えている。

こうして、妙法寺は、江戸初期に日蓮宗に改宗して成立した典型的な近世寺院であり、厄除け祖師の靈場として庶民の信仰を集めていた寺院であった。

## 二 千部会の実態

千部会とは、祈願・追善等の為に千部の経を読誦する法会であり(10)、読誦する經典は、法華経・浄土三部経・薬師経等があり、各宗派で営まれていた。日蓮宗では、法華経を千部読誦し、これを法華千部会といっている。以下、妙法寺で行なわれた千部会について、儀礼の執行過程、儀礼の内容、儀礼の性格の視野から考察することにしよう。

### (一) 儀礼の執行過程

妙法寺における千部会の開始は、明和三（一七六六）

年、「堀之内妙法寺縁起」に、「爰に報恩の一分は只御威半増益にして、いよいよ感応を祈り奉らんのみか、是によつて来亥のとしより当年におひて毎年七月十八日より同廿七日まで、永代不易の千部を讀じゅし法味にそなへ奉りたく、大願を發起する所なり」とあるように、永代不易の千部読誦会が、来る亥の年、すなわち明和四（一七六七）年から始まったことがわかる。

千部会の執行期間は、縁起にもあったように七月十八日から二十七日までであったが、次の史料をみると、

乍恐以書付奉願候

一 拙寺諸堂修復為助成、来酉年が未年迄拾ヶ年之間、七月十八日が千部十日<sup>#</sup>供養三日都合日数十三日之間修行仕度奉存候、以 御慈悲右願之通被 仰付被下置候ハ、難有仕合ニ奉存候、以上

文政七甲申年

身延久遠寺末

十一月

武州多摩郡堀之内村

妙法寺 ㊦

寺社御奉行所

と、十日間の読誦会のあと供養が三日間あったことがわかる(11)。この願書の主意は、諸堂の修復助成のための千部会を十九年単位で願うというものであった。そし

て、表Iをみる

と、最初の十七カ年を除き十九年単位で願書が出されていたことがわかる。この十七カ年から十九年に変更した理由は、同じ身延派の下谷宗延寺・深川浄心寺が十九年単位で願書を出しているので、この例にならったものと思われる。

しかし、届期間内に住職が遷化したり(12)、寺社奉行が交代した場合は(13)、再び願書を寺社奉行に提出しており、千部会の行事としての取り扱いが厳密な処置を必要としていた。それは、寺社奉行が「人多々も可有之候間、喧嘩口論無之様相慎、火之元入念可申旨、被仰渡奉畏候」と、千部会に細心の注意を払っていることや、千部会が終了する八月朔日に妙法寺が「拙寺千部之儀、当

表I

年	代	期間
明和 4 (1767)	～ 天明 3 (1783)	17年
天明 4 (1784)	～ 寛政 5 (1793)	10年
寛政 7 (1795)	～ 文化元 (1804)	〃
文化 2 (1805)	～ 文化11 (1814)	〃
文化12 (1815)	～ 文政 7 (1824)	〃
文政 8 (1825)	～ 天保 5 (1834)	〃
天保 6 (1835)	～ 弘化元 (1844)	〃
弘化 2 (1845)	～ 安政元 (1854)	〃

七月二日御届申上候通無滞修行相済難有奉存候、此段御届奉申上候」と寺社奉行宛に終了届が出されていることから窺える。そして、みられるようにこれらの願書は全て寺社奉行に宛てられており、千部会は公儀による許可制であった。奥書には身延派江戸触頭である宗延寺の添印があり、月番役寺から寺社奉行の順で許可が必要であったのである。さらに、これと同意の文書は妙法寺の地域の代官である山王兩代官へも提出され、千部会が地域の行事として行なわれていたことが窺えよう。

こうして、千部会は毎年定期間に限り行なうことになったが、都合により期間を変更する場合もあった。

乍恐書付を以御届申上候

一 堀之内妙法寺、例年七月十八日、同廿七日迄千部修行并供養三日、都合日数十三日之間修行仕来候処、此度本山身延久遠寺於深川浄心寺七月十九日、日数六十三日之間開帳仕候、右差支ニ付来ル、六月十八日、日数十三日之間、千部并供養取越修行仕度段、御奉行大久保安芸守様江御届申上度、此段御訴申上候、以上

文化三寅 二月

堀之内 妙法寺 ④  
名主 八十郎 ④

表Ⅱ

年 代	変 更	理 由
文化 3(1806)	7/18~30→6/18~30	本山身延久遠寺於深川浄心寺七月十九日、日数六十三日之間開帳仕候、右差支ニ付
4(1807)	〃	当年之儀ハ無拋差支御座候ニ付
文政12(1829)	〃	〃
13(1830)	〃	〃
天保 8(1837)	〃	〃
嘉永 2(1849)	〃	〃
6(1853)	7/18~30→※	〃
安政 4(1857)	7/18~30→6/18~30	身延御開帳有之候ニ付

〔註〕 ※変更期間は追って連絡するという事で史料上判明しない

荒井常吉様

村岡孫三郎様

これは、妙法寺の千部会が身延久遠寺の江戸出開帳と日時が重なる。そこで、日時を一カ月早めて行ないたいということをし社奉行に願上げているものである。こうした願書は、表Ⅱをみると他の年にも出されている。各年の変更期日は、いずれも六月十八日から三十日と決まっております。とにかく日時を変えても毎年千部会を行なうよう勤めていたようである。また、各年の変更理由は、そのほとんどが「当年之儀は無抛差支御座候ニ付」ということであった。例えば、文政十三（一八三〇）年七月十九日から深川浄心寺において身延久遠寺の出開帳があった際、その初日に妙法寺は参詣し、金百両を奉納し、貫主の杯を頂戴している。このように、各年の変更理由はほとんどが久遠寺の江戸出開帳と関係していたと考えられる。身延派の江戸触頭下谷宗延寺や深川浄心寺でも、久遠寺の江戸出開帳が自坊の千部会と重なった場合、それぞれ延期しており、久遠寺の末寺である妙法寺でも参加を余儀なくさせられたものと思われる。

(二) 儀礼の内容

千部会の儀礼としての姿を、安政六（一八五九）年、

「千部差定」よりみると、七月十八日から二十七日の読誦日のうち、中日の二十二日、結日の二十七日には、音楽・稚児供養を伴った盛大な法要が営まれていたことがわかる。そして、供養日の初日の二十八日には、午前には施餓鬼法要、午後に施主の供養の法要が営まれ、供養の儀礼の中には放生会の儀礼が組み込まれていた。この施餓鬼会は、「障外を偽す餓鬼の為に諸種の飲食を施す法会」<sup>(14)</sup>であり、死者の霊を弔う儀礼である。また、放生会は「捕獲せられたる魚鳥等を贖ひ、之を山野池水に放つ法会」<sup>(15)</sup>で、施主が先祖の菩提のために行なう儀礼である。これらの儀礼が、千部の供養日に行なわれていることは、千部会が追善供養としての性格を色濃くもっていることを示しているといえよう<sup>(16)</sup>。また、中日、結日、供養日には、「陀羅尼三巻・普賢咒一卷・円頓章」と施主の現世安穩の祈禱も行なわれていた。

それでは、文政十（一八二七）年の供養日に回向された「六万部供養文」をみることに、千部読誦の功德について考えてみよう。

(前略)：於此宗内信心之檀越、無貴無賤、無男無女、企千部構之一結、年々以若干世財、投於吾山、從昔歲明和五戊子歲、誦誦法華經一千

部<sup>二</sup>

と、千部講からの布施により千部会が開始できたことを強調し、

至<sup>ル</sup>今<sup>ニ</sup>茲<sup>ニ</sup>文<sup>政</sup>十<sup>丁</sup>亥<sup>歳</sup>、凡<sup>シテ</sup>經<sup>ニ</sup>六<sup>十</sup>年<sup>之</sup>星<sup>霜</sup>、誦<sup>誦</sup>妙<sup>妙</sup>經<sup>之</sup>部<sup>部</sup>數<sup>成</sup>就<sup>ニ</sup>六<sup>萬</sup>部<sup>ニ</sup>而<sup>畢</sup>矣、於<sup>レ</sup>是<sup>ニ</sup>鳴<sup>ニ</sup>三<sup>個</sup>之<sup>梵</sup>鐘<sup>、</sup>營<sup>ニ</sup>三<sup>日</sup>之<sup>法</sup>會<sup>、</sup>備<sup>ニ</sup>山<sup>海</sup>之<sup>百</sup>味<sup>、</sup>供<sup>ニ</sup>養<sup>薪</sup>水<sup>等</sup>之<sup>十</sup>種<sup>、</sup>奉<sup>レ</sup>報<sup>ニ</sup>恩<sup>山</sup>之<sup>一</sup>塵<sup>德</sup>之<sup>一</sup>滴<sup>一</sup>。

と、現在の供養日に至るまで六万部の經典を成就したと言っている。そして、この功德を

夫<sup>レ</sup>法<sup>華</sup>經<sup>之</sup>文<sup>字</sup>者<sup>、</sup>積<sup>ニ</sup>一<sup>々</sup>文<sup>々</sup>是<sup>真</sup>仏<sup>、</sup>字<sup>々</sup>皆<sup>金</sup>色<sup>之</sup>仏<sup>体</sup>也、是<sup>以</sup>、誦<sup>誦</sup>法<sup>華</sup>經<sup>一</sup>部<sup>、</sup>功<sup>德</sup>即<sup>供</sup>養<sup>六</sup>萬<sup>九</sup>千<sup>三</sup>百<sup>八</sup>十<sup>余</sup>仏<sup>也</sup>、然<sup>レ</sup>則<sup>年</sup>々<sup>誦</sup>法<sup>華</sup>經<sup>一</sup>千<sup>部</sup>、功<sup>德</sup>是<sup>供</sup>養<sup>ニ</sup>幾<sup>百</sup>千<sup>萬</sup>仏<sup>也</sup>乎、其<sup>數</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>ニ</sup>計<sup>、</sup>則<sup>其</sup>功<sup>德</sup>亦<sup>不</sup>可<sup>ニ</sup>舉<sup>計</sup>也、而<sup>況</sup>於<sup>ニ</sup>法<sup>華</sup>經<sup>六</sup>萬<sup>部</sup>成就<sup>之</sup>功<sup>德</sup>乎

と、法華經の文字を仏の數と對比させ、千部誦誦のありがたさを誇張している。

こうした千部会は、縁起に「されとも至て大望の事なれば信心のおのく方ともくに力をあわせ永く怠<sup>退</sup>転なく相統はあるやう信心の御施入ひとへに希ひ奉る而

已」と、宣伝されているように、庶民を対象としたものであった。このため寺院側は、「毎年七月十八日ヨリ廿七日迄祈禱回向相勤并志之精靈、永代日牌備無怠慢御回向相勤者也」ということで、永代千部の本願人を募つたのである。

(三) 儀礼の性格

前述したように、妙法寺の千部会の目的は施主の供養にあつたが、寺院側としては「諸堂修復為助成」ということであつた。これは儀礼の中にも「当年ハ右供養日數三日之所、一日ニ相仕舞残り二日祖師堂再建成就仕候ニ付、入像供養并諸施入之面々祈禱回向仕度奉存候」とあり、祖師堂の入像供養の儀式が繰り込まれていることから窺える。また、妙法寺では、千部会の外にも祖師像の開帳を行ない普請の費用に充てており、儀礼行事が勧進活動の役割を果たしていたことがわかる。

また、妙法寺では、毎年行なわれている千部会の外に、「高祖大士五百五十遠忌ニ付当八月四日ハ十三日迄十日之間、毎月妙經式百部ツ、修行所化二十人ツ、来卯ノ十月迄十五ヶ月之間、都合妙經三千部修行、五百五十遠忌報恩謝德ニ資し奉る」と宗祖の遠忌に際し千部の經を誦誦するといった千部誦誦會が数カ年に一度の行事として

営まれていた(18)。

しかし、妙法寺における千部会は、年中行事の一貫として行なわれるものが比重を占め、「当寺は遙かに都下を離れたりといへども、靈驗著き故に、諸人遠きを厭はずして、歩行を運び渴仰す。毎年七月法華千部、十月十三日御影供を修行す。その間郡参稻麻の如し」(19)と、毎年七月に行なわれる千部会は(20)、十月のお会式とともに参詣者が絶えなかった。そして、この賑わいは、「境内門前挑灯・幟等、年々千部執行、会式興行節相用申候」、「例年千部・会式之節、御門前九尺ニ式間之水茶屋香具見世沓ヶ所差出し、渡世仕来候」と提灯や露店が出ていることから窺えよう。

### 三 講中の活動

最後に、妙法寺の千部会に参加した人々について、若干触れてみたい。

千部会の施主についてわかる史料として、文政四(一八二一)年の「巳千部施主日控」江戸期天保年間と推測される「千部施主日控」・「千部施主日帳」が残存している。これらの史料は、千部会の期間内の各日ごとに施主名が記載されているものである。これにより、千部

表Ⅲ

月日	(1)	(2)	(3)
7.18	桑名・成瀬俣		
19	靈巖嶋御住居		
20	御本丸安部氏御連中	御本丸	御本丸
21	西御本丸長嘉・長林・長栄様	紀州御殿	紀州御殿
22	一ツ橋御殿・御本丸於勢野殿	市ヶ谷御殿	市ヶ谷御殿
23	市ヶ谷御殿多賀氏	一ツ橋御殿	一ツ橋御殿
24	清水御殿	御殿御連中	御殿御連中
25	紀州御・殿勝山・小山・浦瀬殿		
26	田安御殿	田安御殿	田安御殿
27		加州御殿	加州御殿
28			

〔出典〕(1)文政4年「巳千部施主日控」(2)江戸期「千部施主日控」(3)江戸期「千部施主日帳」

の施主の性格についてみると、大別して武家・江戸近在の講中に分類できる。武家は表Ⅲに掲げる如くで、誦誦日の全般にわたり施主が立っている。この武家それぞれの性格等については今後検討を要するところであるが、中でも加州御殿は、天保三（一八三二）年七月二十七日に施主となり、祖師御帷子・金五両を当日の施主料として奉納している。次に、講中の数をみると、表Ⅳの

表Ⅳ

	(1)	(2)	(3)
7.18	7	7	7
19	8	11	11
20	5	8	6
21	11	13	12
22	10	11	11
23	15	13	12
24	11	13	14
25	11	6	6
26	8	7	2
27	7	6	7
28	1	1	0
計	94	96	88

〔出典〕(1)～(3)は表Ⅲと同じ

如くで、文政四（一八二二）和の千部会参加講中の総数は九十四を数える。これらの講中のほとんどは江戸講中であるが、日本橋・神田・両国・石田・馬喰町の講中は五カ町講中と違って妙法寺の諸行事の中心となっていた。こうした講中の千部会参加の様子を弘化四（一八四

七）年「八万部供養献備其外取扱手控」によりみると、「当七月千部興行之結日、八万部供養有之、右<sub>二</sub>付而者御宝前百味御備<sub>三</sub>相成候」と千部誦誦の結日に供養を行なっている。これに対し、寺院側は、「右供養<sub>二</sub>付、諸講中<sub>三</sub>御初穂奉納有之候分<sub>二</sub>納金無之方<sub>三</sub>は、此方之差斗ひを以御札差遣候」と、供養のお札として御札を配ったのである。この年に供養を行なった講中は七十六で、その時に渡した御札の数は約五千枚を数える。参加講中は、江戸の講中を始めとし、千住講中・葛西講中・行徳講中・稲毛講中といった講中がみられた。中でも下総講中は、三名の代表で金二百疋を奉納し、御札三百枚を持ち帰っており、妙法寺の信仰圏は幕末には千葉方面にまで広がっていたのである。

これらの講中は、前述した如く千部会の施主として金を奉納するわけであるが、その奉納の形態についてみてみよう。文政十一（一八二八）年の「永代不易千部講積金請取帳」をみると、「当子九月<sub>二</sub>四度之講<sub>三</sub>を為<sub>二</sub>卷ヶ年、十三ヶ年迄積金<sub>三</sub>廻分金三両宛之割合<sub>二</sub>御持<sub>三</sub>参可被下候」と、講中は年間に四回の講を開いて積金を行ない、施主日に奉納するといった形態がとられていたようである。この積金を回収するのが、講の世話役をする講



頭の役目であるが、講中の中にはこうした手間を省き、妙法寺に金銭を先納し、その利息を毎年の千部会の奉納料としている賢実な講中もあった(21)。

次に妙法寺の再興における講中の役割についてみてみよう。安永二(一七七三)年、住職の後任に閑して、「何卒我々願上候通、弟子相統仕候様被為 仰付被下置候者、我々為冥加御代々御尊前様御年礼ニ御出府被遊候節、為御雑用金貳拾兩宛永々御年礼ニ者不相替奉納可仕候」と、檀家・講中が二十兩を後任に献納することになった。そこで「尤末々之処乍、無覚束可被為思召候得共、惣且中搆中共ニ銘々子々孫々迄堅申送、急度奉納可為仕候」と、檀家の外に講中が後任の心配をしていることが注目される。これらの講中をあげると表Vのようになり、十六講中のうち九講中が千部講中という名称であった。中でも、権田原千部講中は、「毎年十三日千部会式搆中罷出、右世話仕候」と、妙法寺の年中行事の世話をしていた。そして、「千部之節、御手之糸善之綱御菓子相納メ、右品々千部御札私共搆中方へ相配申候、正月三ヶ日御札正五九月陀羅尼会式、御寺へ搆中方へ御配被下候」と各行事に参加し、供物を奉納することにより御札を頂戴している。こうした千部講中は、妙法寺の開帳に

表V

講 名	講頭数	講 名	講頭数
中橋御花講中	7	本郷千部講中	3
芝 講 中	1	深川千部講中	6
四ッ谷取持講中	5	品川千部講中	2
丸山御花講中	1	牛込千部講中	4
糺町取持講中	2	権田原千部講中	4
鮫河橋取持講中	2	新橋千部講中	1
日本橋講中	1	京橋千部講中	3
		永川千部講中	2
		芝千部講中	2
	19		27

も積極的に参加し(22)、文化八(一八一二)年の祖師堂棟札には不易千部講中の連名がみられ、妙法寺の再興に重要な位置を占めていたのである。

### おわりに

以上、みてきたことを整理すると、妙法寺の千部会は、

(1) 寺院再興を目的に、施主の先祖供養を行なったもので、毎年定期的に行なわれるもの、(2) 宗祖の報恩謝徳を目的として、数ヶ年に一度不定期的に行なわれるもの、の二つのタイプがあることが明らかになった。これらの共通点は、追善・報恩のために行なわれたことにあるが、妙法寺における千部会は縁起にも唄われているように(1)の庶民を対象としたものが中心であった。このため寺院側は、千部誦誦の功徳を説き、施餓鬼等の先祖供養の儀礼を供養日に行ない、千部の施主を募ったのである。これに対し、武家・町人は、永代不易の本願人として金品を奉納し、先祖の供養を行なった。とりわけ、江戸町人は千部講中を結成し、積極的に千部会に参加したが彼らの助成が寺院の再興に果たした役割は大きかったといえよう。

こうして、妙法寺では、年中行事として行なわれる千部会が比重を占めていたのであり、この儀礼の日常性が庶民の参加を促していったのである。また、この千部会が寺院再興のため庶民からの奉納を対象として行なわれたことは、儀礼としての千部会の特質を示しているといえよう。なお、宗祖の遠忌に際して行なわれる千部会は、宗祖への報恩を目的としていることから七月の千部会と

は性格を異にし、むしろ、十月の御会式の行事と結びついて展開していったと考えられる。  
今後は、この宗祖の遠忌に際して行なわれる千部会の性格について、論究していきたいと思う。

註

- (1) 影山堯雄著『日蓮宗布教の研究』五〇三頁
- (2) 中尾堯稿「関東日蓮教団の動向」(宮崎英修編『近世法華仏教の展開』所収)
- (3) 高木豊稿「日蓮宗の開帳と縁起」(『大崎学報』一一三・一一四合併号)
- (4) 北村聡稿「江戸における日蓮宗の開帳」(中尾堯編『日蓮宗の諸問題』所収)
- (5) 池上本門寺・中山法華経寺では、春のお千部・秋のお会式として定着していた(中尾堯稿「題目講の機能と性格」、久保田正文編『宗教社会学とその周辺』所収、中山法華経寺誌編纂委員会編『中山法華経寺誌』)。
- (6) 妙法寺に関しては、庄司寿完稿「法華仏教と庶民信仰」(宮崎英修編『近世法華仏教の展開』所収)があり、参考にさせて頂いた。
- (7) 東京都杉並区堀之内妙法寺文書(『堀之内妙法寺史料』所収)、以下、特に註記しない史料や事実関係の指摘は、

全て右史料集によった。

- (8) 『杉並区史』一一八八頁『目黒区史』三六一―三七一頁
- (9) 『江戸名所図会』(角川書店版)
- (10) 『望月仏教大辞典』三〇〇頁
- (11) 千部会を行なっている江戸の日蓮宗寺院の中で、読誦日  
のあと供養を行なっている寺院として、下谷宗延寺・深  
川淨心寺・牛込幸国寺(『東都歳事記』)が確認できる。  
(12) 十カ年の期間内の天保七(一八三六)年、住職の日憲が  
病死の時、後住の日淳が届書を、千部開始前の七月二日  
に寺社奉行に提出している。
- (13) 文化七年庚午七月十三日大久保安芸守様御転役ニ付、御跡  
役有馬左兵衛亮様へ御届申相済、去末年迄兩年右之通御  
届申、修行仕候
- (14) 『望月仏教大辞典』二九〇七頁
- (15) 右同 四六一六頁
- (16) 牛込の幸国寺では、読誦期間内の宗祖誕生会に際し放生  
会を行ない、読誦日のあとの供養として施餓鬼を行なっ  
ており(『東都歳事記』)、宗祖への報恩の儀礼として  
行なわれている。
- (17) 江戸近郊の洗足御松庵では、開帳・千部会を行ない祖師  
堂普請の費用に充てている(拙稿「近世における日蓮宗  
寺院の再興とその意義」、『日蓮教学研究紀要』九号)
- (18) 池上本門寺では、宗祖の四百五十遠忌の年の九月十八日  
より十月二日までの間、五千部の経を読誦しており(『大  
田区史』寺社一―三三七頁)、宗祖の遠忌に際して行な  
われる千部読誦会は、関東の各本山でも営まれていたも  
のと思われる。
- (19) 『江戸名所図会』
- (20) 江戸周辺の日蓮宗寺院で年中行事として行なわれていた  
千部会を、『東都歳事記』により一覽すると、補表のよ  
うになる。各寺院の千部会は、三―五月に集中している  
が、妙法寺では七月に行なっている。なお、妙法寺では  
千部会に際し施餓鬼を行なっており、この結びつき及び  
七月に千部会を行なう必然性については、千部会の性格  
を知る上で問題にされるべき点であり、今後の課題とし  
たい。
- (21) 文政八(一八二五)年、橘町講中は、八十両を妙法寺に  
納めていた。そして、その利息を毎年七月の千部の施主  
日に受け取り、その年の奉納金に充てていた。
- (22) 寛政六(一七九四)年の「開帳願控」には、神田・日本  
橋・両国・市ヶ谷・本所浅草の千部講中の記載がみられ  
る。

補 表

寺 院 名	開始	終了	期間	備 考
牛 込 幸 国 寺	2.11	2.22	11	9日説法16日誕生会、この日、本尊祖師御更衣会放生会・音楽・児供養その他執事あり、22日施餓鬼あり
平 賀 本 土 寺	3. 3	3.13	11	
中 山 法 華 經 寺	3. 9	3.18	10	此間音楽等あり、江戸より参詣多し、行程日本橋より4里余りあり
深 川 浄 心 寺	3. 9	3.18	10	
下 谷 宗 延 寺	3.13	3.22	10	この間開帳23日音楽、児供養・放生会あり
池 上 本 門 寺	3.19	3.28	10	この間開帳音楽あり、遠近の縹素群集す
浅 草 幸 龍 寺	4. 8	4.17	10	
大 塚 本 伝 寺	4. 8	4.14	7	
雑司ヶ谷 鬼子母神	5.18	5.28	11	18日万巻陀羅尼修行あり
本 所 報 恩 寺	6. 3	6.12	10	開山日住上人在職の頃より続いて修行すといふ
堀之内 妙 法 寺	7.18	7.27	10	
真 間 弘 法 寺	9. 9	9.18	10	この間遠近の老少毎に歩を運ぶ

〔註〕平賀本土寺のみ本土寺文書による